

新たな学校の創造 ——学校長によるマネジメント・マインドの醸成——

広島県東広島市立高美が丘中学校

ひらかまさゆき
平賀正幸

【実践の内容】

完全週5日制のもとでの学力の向上、達成目標に準拠したいわゆる絶対評価の実践、信頼される学校づくりのための学校評価・人事評価の実施等々、学校改革の1年目を迎えた。

この機会を捉え、教えるプロとしての優れた教師の育成や、説明責任を果たす開かれた特色ある学校づくりをすることとした。まず、校長の経営理念・経営目標を示し、運営計画では、機能的な組織態勢を確立した。さらに、PDCAのマネジメントサイクルを活用した人材を育成していった。教育活動計画では、学力の定着・向上、豊かな心・逞しい体力を育む教育内容を創造するとともに、指導方法等の実践研究を行い、新たな学校の創造をしていった。優れた教師も増え、生徒も明るく生活・学習をし、学校がよりよく変容している。

【論文内容の紹介】

1 運営計画

- (1) 学校経営計画の提示と説明：年度初めに全教職員に示し、教育説明会を開催し、教師10名に保護者へ説明させる。
- (2) 分掌組織の見直しと主任の案作成：研修・生徒会主任を新設し、7名の主任に分掌内容の年間案を指導しながら作成させた。次案は、1/4改善した案を提起させている。
- (3) 組織の機能化と主任の育成：生徒と共にする時間を増やすため、主任案を提起させる週1回の企画委員会で審議・決定、まとめを全教職員に周知し活動させる。職員会議を年最高6回とした。

- (4) 生徒指導態勢の確立：不登校・いじめ等のマニュアルを作成した。週1回の部会で、現状と取り組みを6名に提起させ協議する。校長とカウンセラーの指導助言を加え企画委員会へ提案する。協働態勢を築き、全体へ周知し実践、指導効果を高めている。

2 教育活動計画

(1) 基礎学力の定着と絶対評価

- ①「朝の読書」の徹底：研修主任を中心にした研修部の企画・運営で、毎日10分間、自分の好きな本を読んでいる。
 - ②全教科の評価規準と年間指導計画の作成：教務主任が中心の教務部の提案で作成した年間指導計画は、單元ごとに学習指導要領の教科の内容と評価規準を統合した実現目標を創造した。さらに、実現目標を重点観点に焦点化し、評価の方法も記したのものとした。総合的な学習との関連欄も設けた。
 - ③評価総括表と具体観点基準表の作成：観点別評価のため、教務の提案で年間の総括表を作成した。さらに、研修の提案で、改善する箇所が分かり、客観性ある具体観点基準表を、学期ごとに生徒・保護者に示している。本年度末チェックし、来年度には、一部をさらに改善することとしている。
 - ④信頼性高い評定と通知表の改善：研修の案で、評定換算表を作成し信頼性高いものとした。相対評価も載せた通知表を新しく作成し、保護者に説明した。チェックし、次年度一部改善する。
 - ⑤指導案の工夫：指導案には、日常化するよう評価方法とその評価が具体観点表のどこに位置するかを示した。
- (2) 個性を生かす選択履修の創造：興味・関心で選択する技能教科、補充的・発展的学習を選択する5教科、全ての教科内に数コースを設定して自己評価力・選択能力を育成している。また、地域の人材も活用している。評価は自己評価を中心に行っている。
 - (3) 総合的な学習の時間の創造：研修部の提

案と各学年部の研究ですすめていった。教科と関連させ、各学年系統化させたカリキュラムの創造をした。直接体験を取り入れ、生徒の将来に必要な資質能力を見極めたテーマを設定した。興味・関心のあるものを自ら選択でき、自ら学ぶための学習過程を設定し、自ら考える力などの「生きる力」を育むよう開発した。評価は、よさや進歩の状況を過程ごと、ポートフォリオ的に文章記録し、通知表に記している。

1 学年(70時間と30時間)：音声言語を中心とした学習(群読,朗読,3分間スピーチ)と情報教育

2 学年(70時間と30時間)：文字言語を中心とした学習(コンピュータを使った個人新聞づくり)と職場体験学習

3 学年(80時間)：進路実現学習(高校等訪問学習と自らの課題を解決するためのPDCAサイクル学習)

- (4) 行事の企画運営と生徒会活動の活性化：行事「入学式・卒業式」等は総務部が企画委員会に提案し、中心となって運営する。生徒と教師が一緒になって取り組む行事「運動会・文化祭」等は、生徒会主任が、全体から係の担当者までの全てを網羅して企画・提案する。「クラスマッチ・地域への進出行事」等は、生徒が主になって企画・運営する。行事後、生徒全員が感想文を書き、校長も読んで次の企画に生かす。
- (5) 感動ある教育活動の創造：本物体験をできるだけさせている。
- (6) 関わりきる生徒指導：生活3訓を設定し、全職員による「とにかく動く、動きながら考える」の取り組みをしている。
- (7) 部活動の活性化：文武両道を掲げ全員入部。生徒指導係の部活動担当の企画・調整のもと機能的に活発な活動をしている。水泳、新体操、柔道等は、現在ある部へ籍をおき、社会体育を設定して、活動させている。

(8) 指導方法の工夫改善

① 習熟度別少人数学習(数学)の取り組み：

5原則の設定

- ・生徒一人ひとりの学力を伸ばすこと。伸びない場合原因を分析し改善する。
- ・1CL2展開とし、学級集団を大切にすること。
- ・章毎、基礎・応用を生徒選択とすること。その際、導入時小テストをもとに自己評価し選択させること。教師は相談にのり、支援する。
- ・学習内容は、基礎コースは「じっくり」、応用コースは「どんどん」とする。
- ・評価は、両コースとも同一評価とする。

数学科5名が、意欲的な学習を実践しながら創意工夫して取り組んでいる。

- ② はつらつプランの活用と取り組み：単県で、1学年対象に国語、数学、英語で少人数の学習を推進。本校は数学、英語を、本務者と非常勤講師で取り組んでいる。実施計画と実践の工夫は教科の担当が行っている。

3 成果と課題

教師の指導力・授業力の向上を目的に公開研究会を催した。評価を取り入れた指導案と研究授業、指導助言者なしで自校教師に運営・応答をさせ、今では、各部の提案・運営は、その部の次の主任候補予定者が「生徒を中心に据えた」発案をし、運営・実践している。

平成14年、県内の全中2を対象とした基礎・基本定着状況調査で、英数国では県平均より12~17ポイント上回った。生活・意識実態調査では、「周りに自分を理解してくれる先生がいる」が、県48.4%に対し本校は、61.1%であった。保護者・地域住民の教育内容への参画は年間260名に達した。平成14年4月から12月までに、全国誌の原稿依頼7、研修への講師依頼14、全国各地からの視察114校等あり、人材育成にもなっている。

負担のかからない「学校評価」「人事評価」の開発・実施、道徳の授業研究、いじめ・不登校・問題行動の半減、家庭学習の充実等が課題となる。